

広島平和記念資料館蔵

あいほらひでつぐ  
相原秀二資料目録 [公開用]

(識別コード SC0001)

2022年（令和4年）2月作成

広島平和記念資料館

### ◎相原秀二氏経歴 [1909年(明治42年)－2008年(平成20年)]

1909年(明治42年)、愛媛県に生まれる。1939年(昭和14年)に十字屋文化映画部へ入社し、その後、戦争による企業統合で社団法人日本映画社企画部に移籍。1945年(昭和20年)に広島・長崎へ原子爆弾が投下されると記録映画の製作を企画し、プロデューサーとして広島・長崎取材した。広島の現場撮影では映画の物理班の演出を担当し、医学班などとの連絡調整にもあたった。広島には、1945年(昭和20年)の9月28日から10月23日まで滞在している。

戦後は、出版社に勤務。1967年(昭和42年)、接收された原爆記録映画が米国から日本へ返還されるとノーカットで一般公開する運動に参加。またこれまでに原爆の被害や原爆被災写真についての詳細な調査・研究を行い、仁科記念財団編『原子爆弾－広島・長崎の写真と記録』や飯島宗一・相原秀次編『写真集 原爆を見つめる－1945年広島・長崎－』の執筆・編集にも関わった。

### ◎原爆被災記録映画「広島・長崎における原子爆弾の影響」

1945年(昭和20年)9月、原爆の被災を記録するため社団法人日本映画社(現日映映像)が企画・撮影を始めた映画。学術的な見地から撮影され、多くの研究者が監修にあっている。途中、連合国最高司令官総司令部(GHQ)に撮影中止を命ぜられたが、米国戦略爆撃調査団の委嘱を受ける形で製作が継続された。1946年(昭和21年)4月、「EFFECTS OF THE ATOMIC BOMB ON HIROSHIMA AND NAGASAKI」として映画は完成した。

映画は、物理編や医学編など広島・長崎合わせて19巻からなり、3時間近い上映時間になっている。全編、英語で構成され、音楽も挿入されている。完成後、関係する写真フィルムとともに米国に接收され、日本に返還されたのは1967年(昭和42年)11月のことであった。

### ◎原子爆弾災害調査研究特別委員会との関係

相原秀二氏は被爆の実態を正確かつ科学的に記録するという思いから映画の監修を原子物理学の第一人者であった理化学研究所の仁科芳雄氏に依頼した。依頼を受けた仁科氏は、映画製作には広く学界を動員することが必要と感じ、文部省へ連絡する。9月14日、文部省の学術研究会議に「原子爆弾災害調査研究特別委員会」が設置され、学術調査団として、約200名の調査員を広島・長崎へ派遣することが計画された。同じ頃、日本映画社内でも33名の映画製作スタッフの編成が決まり、撮影班は生物班、物理班、土木建築班、医学班、ニュース及び遊撃班の5班に分かれた。映画の製作は、委員会の補助機関という立場で行うことになり、広島・長崎の撮影では被害の状況や調査団の調査の様子などをカメラに収めた。

分類番号	資料名	年月日	内容	大きさ (縦×横 cm)	数量	オンライン 閲覧	備考
AH01-0034	原爆被害調査日誌	1945年(昭和20年)9月～10月	当時、理化学研究所に在籍し、原子爆弾災害調査研究特別委員会の生物学科会の一員として広島・長崎へ入った中山弘美氏の調査日誌。中山氏は、映画の中で原爆による植物への影響などを撮影した生物班と行動を共にした。広島には、1945年(昭和20年)9月21日から30日まで滞在し、爆心地に近い西練兵場や広島護国神社などで被爆した植物への影響を調査した。日誌には、1945年9月から10月までの広島・長崎での調査内容と撮影の様子が図も使用しながら克明に記されている。	20.7×16.7	1冊		
AH01-0050	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。広島原爆の放射能についてまとめられている。Tの印がつけてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きで、一部、校正されている。日本語に対応した英単語が書きこまれている箇所もある。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	13枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0051	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。広島原爆の熱線による影についてまとめられている。Tの印がつけてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きで一部、赤や青の鉛筆で校正されている。線画の挿入場所も示されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	5枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0053	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。広島原爆の放射能についてまとめられている。Tの印がつけてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。青鉛筆で手書きされ、一部赤鉛筆で校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	13枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0054	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。広島原爆の熱線による影についてまとめられている。Tの印がつけてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。青鉛筆で手書きされ、一部赤鉛筆で校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	5枚	<a href="#">可</a>	

分類番号	資料名	年月日	内容	大きさ (縦×横 cm)	数量	オンライン 閲覧	備考
AH01-0057	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。長崎の原爆の爆風についてまとめられている。Tの印が付けてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きしたもの。地名や町名などにアルファベットで読みを示している。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	7枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0060	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。長崎の原爆の熱線についてまとめられている。Tの印が付けてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きしたもので、一部校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	7枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0061	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。長崎の原爆の放射能についてまとめられている。Tの印が付けてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。青鉛筆で手書きされ、一部校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	6枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0062	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。広島原爆の熱線による影についてまとめられている。Tの印が付けてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きされ、一部校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.4	5枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0064	原爆被災記録映画の物理編について	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の英訳や録音に協力した外務省の島内俊郎氏に宛てたもの。長崎の物理編の解説の順序が示され、放射能について解説の英訳を島内氏の自宅へ届けることも記されている。	31.1×21.2	1枚	<a href="#">可</a>	

分類番号	資料名	年月日	内容	大きさ (縦×横 cm)	数量	オンライン 閲覧	備考
AH01-0065	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。長崎の原爆の熱線による影についてまとめられている。Tの印が付けてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きされ、一部校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	3枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0066	原爆被災記録映画の物理編の解説・タイトル原稿	1946年(昭和21年)2月～4月	映画の物理編の日本語原稿。広島原爆の熱線による影についてまとめられている。Tの印が付けてある文章がタイトルやテロップとなり、画面上に字幕として映し出された。解説は音声による説明となった。鉛筆書きされ、一部校正されている。映画は、アメリカ側の委嘱を受ける形で製作されたため、全編英語で構成された。まず日本語で原稿をつくり、その後、英訳された。	31.1×21.2	5枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0068	広島・長崎での原爆被害調査の費用を記した文書(英文)	1946年(昭和21年)	1945年(昭和20年)12月22日から1946年(昭和21年)1月25日にかけて長崎で調査を行った理化学研究所の増田時男氏、坂田民雄氏、中根良平氏の現地での滞在費、交通費などが記されている。3名は、原爆被災記録映画の製作スタッフと共に長崎へ赴き、撮影に協力した。1946年(昭和21年)1月26日から2月9日まで広島で調査を行った、理化学研究所の宮崎友喜雄氏、増田時男氏の現地での滞在費や交通費なども記されている。	30.1×21.0	2枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0089	米国戦略爆撃調査団の映画製作について関係課への通達文書	1946年(昭和21年)5月24日	相原秀二氏ら、4人の日本人が米国戦略爆撃調査団の映画製作のために雇用されていることが記され、その業務の遂行のためにあらゆる便宜をはかるよう各課へ要請する文書。映画製作の作業のためビル(東京都千代田区の明治生命館)の625号室、629号室が充てられていたことがうかがえる。米国戦略爆撃調査団の映像班の一員として原爆被災記録映画の監修責任者として名を連ねたダニエル・マックガバン氏のサインが入る。	26.6×20.4	1枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0092	長崎における原子爆弾の爆発地点、高度及び火球の半径に関する調査報告	1945年(昭和20年)12月20日	当時、理化学研究所に在籍し、原子爆弾災害調査研究特別委員会の一員として1945年(昭和20年)9月～10月に広島・長崎へ入った木村一治氏と田島英三氏の報告書の原稿。二人は映画の中で原爆による植物への影響などを撮影した生物班と行動を共にした。調査では建物や石に残った影を測定し、爆心地、爆発高度、火球の大きさを求めた。理化学研究所の原稿用紙に記されている。	29×21	2枚	<a href="#">可</a>	資料は台紙に貼り付けである。原稿3枚のうち1枚がAH01-0093の原稿1枚と同じ台紙に貼り付けてある。

分類番号	資料名	年月日	内容	大きさ (縦×横 cm)	数量	オンライン 閲覧	備考
AH01-0093	爆央附近の放射能 (ローリッツェン電気計)	1946年(昭和21年)2月28日	当時、理化学研究所に在籍し、原子爆弾災害調査研究特別委員会の一員として1945年(昭和20年)9月～10月に広島・長崎へ入った木村一治氏の報告書の原稿。木村氏がローリッツェン電気計で爆心地をはじめ、広島の各地点で測定した放射能の値がまとめられている。9月4日と10月20日に測定した値が記されている。理化学研究所の原稿用紙に記されている。	29×21	2枚	<a href="#">可</a>	資料は台紙に貼り付けてある。原稿2枚のうち1枚がAH01-0092の原稿1枚と同じ台紙に貼り付けてある。
AH01-0094	広島における原子爆弾の爆発地点、高度及び火球の半径に関する調査報告	1945年(昭和20年)12月20日	当時、理化学研究所に在籍し、原子爆弾災害調査研究特別委員会の一員として1945年(昭和20年)9月～10月に広島・長崎へ入った木村一治氏と田島英三氏の報告書の原稿。二人は映画の中で原爆による植物への影響などを撮影した生物班と行動を共にした。調査では建物や石に残った影を測定し、爆心地、爆発高度、火球の大きさを求めた。報告書では、爆心地は島病院の玄関から東南約25mの地点、爆発高度は570m±20m、火球の直径は100mと推定されている。理化学研究所の原稿用紙に記されている。	29×21	3枚	<a href="#">可</a>	原稿6枚が3枚の台紙の両面に貼り付けてある。
AH01-0101	原爆被災記録映画のプロローグの構成案とメモ	1945年(昭和20年)10月15日以後	プロローグの構成案は映画の中で原爆の熱線や放射線の影響を撮影した物理班の演出を担当した小畑長蔵氏が記したもの。1945年(昭和20年)10月15日を過ぎて書かれた。目的として「世界平和のために、戦争の不幸を再び繰り返さぬためにこの記録映画を製作する」という強い決意が述べられている。構成案は日本映画社の原稿用紙に記され、一部校正あり。メモは相原氏が映画製作当時ではなく、後に記したもの。相原氏が担当した映画の物理編の製作時の苦労などが記されている。	29×21(プロローグ構成案) 25.7×18.2(メモ)	9枚	<a href="#">可</a>	プロローグ構成案12枚が7枚の台紙に、貼り付けてある(片面に貼り付けたもの2枚、両面に貼り付けたもの5枚)。メモは2枚。
AH01-0157	原爆被災記録映画製作に関する日誌	不明	1945年(昭和20年)9月3日の原爆被災記録映画製作の着手から始まり、製作の経緯、広島、長崎での撮影の様子、原子爆弾災害調査研究特別委員会の調査団の調査の動向が日付順に記されている。映画製作当時ではなく、後に書かれたもの。	25.7×18.2	48枚		
AH01-0166	原爆被災記録映画製作に関する日誌	不明	1945年(昭和20年)9月15日～19日の日誌。映画撮影に入る前の製作スタッフや理化学研究所主任研究員の仁科芳雄氏をはじめ、原子爆弾災害調査研究特別委員会の研究者との打ち合わせなどについて記されている。	21.9×27	23枚		
AH01-0206	明治生命館629号室での米国戦略爆撃調査団の映画製作について(英文)	1946年(昭和21年)5月21日	原爆被災記録映画の監修責任者として名を連ねたダニエル・マックガバン氏から日本映画社へ宛てたもの。製作中の原爆被災記録映画の中にどのようなイメージのサウンドトラックを入れたいのかを伝えている。	33×20.3	1枚	<a href="#">可</a>	
AH01-0364	原爆被災記録映画の製作に関する日誌	不明	1945年(昭和20年)9月13日から10月23日までの原爆被災記録映画の製作に関して日付順に広島での撮影の様子などをまとめたもの。映画製作当時ではなく、後に書かれたもの。	25.7×18.2	14枚(白紙1枚含む)		

分類番号	資料名	年月日	内容	大きさ (縦×横 cm)	数量	オンライン 閲覧	備考
AH01-0825	原爆被災記録映画製作に関する日誌	不明	1945年(昭和20年)9月7日～15日の日誌。映画の撮影記録用紙を使用し、映画撮影に入る前の研究者との打ち合わせ、調査状況について記されている。	25.7×36.1	6枚		
AH01-0826	原爆被災記録映画撮影に関する日誌	不明	1945年(昭和20年)9月～10月の日誌。映画撮影に入る前の製作スタッフや理化学研究所主任研究員の仁科芳雄氏をはじめ、原子爆弾災害調査研究特別委員会の研究者との打ち合わせ、広島での撮影状況などについて記されている。	21.9×26.9	38枚		
AH01-0828	撮影記録報告用紙	1946年(昭和21年)1月26日	1946年(昭和21年)1月26日の長崎での第二次撮影の撮影記録。映画の中で原爆の熱線や放射線の影響などを撮影した物理班の撮影記録用紙。撮影者は俣野公男氏で浦上天主堂や三菱製鋼所などで撮影したことが記されている。	19.2×24.7	10枚	可	
AH01-0829	長崎での撮影と調査の許可を伝える文書(英文)	1945年(昭和20年)12月17日	米国の調査団で長崎の調査に加わった海軍技術調査団から発令されたもの。映画製作のために長崎での調査と撮影が許可され、滞在中はあらゆる便宜を図ることが求められている。原本の英語の文書を手書きで写したものの。	29.5×20.9	2枚	可	
AH01-0830	撮影記録報告用紙	1946年(昭和21年)1月13日～1月19日	1946年(昭和21年)1月に行われた長崎での原爆被災記録映画の第二次撮影の記録。映画の中で原爆の熱線や放射線の影響などを撮影した物理班の撮影記録用紙。所定の撮影記録報告用紙ではなく、撮影者、撮影日、撮影機などの項目は手書き。撮影者は俣野公男氏で山里国民学校、城山国民学校などで撮影したことが記されている。	24×25.7	5枚	可	資料はルーズリーフの用紙に貼り付けてある。
AH02-1204	撮影記録報告用紙と撮影メモ	1945年(昭和20年)10月5日～10月21日	原爆被災記録映画の広島での撮影記録。映画の中で爆風による建築物や樹木への被害などを撮影した土木建築班と原爆の熱線や放射線の影響などを撮影した物理班の撮影を記録したもの。撮影者、撮影日、撮影機、使用フィルムなどの項目が設けられ内容が記されている。撮影者は、土木建築班が三木茂氏で物理班は俣野公男氏。土木建築班の撮影記録を見ると、広島県産業奨励館(現原爆ドーム)や広島県商工経済会(現広島県商工会議所)から廃墟となった広島市の街を撮影したことが分かる。物理班の撮影記録からは爆心地付近の放射線測定の様子や熱線による万代橋の欄干の影などを撮影していることが分かる。撮影メモは日本映画社の社内伝票を使用し、爆心地の島病院や高須での撮影の様子が記されている。	25.7×18.2(撮影記録報告用紙) 18.2×12.8(撮影メモ)	29枚	可	29枚のうち、21枚が撮影記録報告用紙。撮影記録報告用紙はルーズリーフの用紙に貼り付けてある。8枚が撮影メモ。
AH02-1205	撮影記録報告用紙	1946年(昭和21年)1月13日～1月26日	1946年(昭和21年)1月に行われた長崎での原爆被災記録映画の第二次撮影の記録。映画の中で原爆の熱線や放射線の影響などを撮影した物理班の撮影を記録したもの。所定の報告書の様式と手書きで項目を書いたものが混じる。撮影者は俣野公男氏で浦上天主堂や三菱製鋼所内、山里国民学校、城山国民学校などで撮影したことが分かる。	25.7×18.2	17枚	可	資料はルーズリーフの用紙に貼り付けてある。

分類番号	資料名	年月日	内容	大きさ (縦×横 cm)	数量	オンライン 閲覧	備考
AH02-1218	奥山大六郎氏のメモ	1945年(昭和20年)9月8日～25日	映画の企画・調査にあたった奥山大六郎氏のメモ。奥山氏は映画の中で原爆による植物への影響などを撮影した生物班の一員として広島・長崎に入った。映画の製作スタッフにとって原爆の威力や被害の特徴は未知なものであったため、撮影に入る前に監修者である理化学研究所主任研究員の仁科芳雄氏と頻りに連絡を取りながら、大学の研究者や軍関係者と面会し構成案を作って行く様子が記されている。生物班が9月19日に東京から広島へ向けて出発していることも分かる。	25.7×18.2	1枚	可	資料2枚が1枚のルーズリーフの用紙に貼り付けてある。
AH02-1230	録音日程表	1946年(昭和21年)3月28日～4月8日	原爆被災記録映画の音声の録音の日程を記したものである。映画の中で、広島放射能や熱線、長崎の爆風の音声について4月4日～6日にかけて録音を行うことが記されている。	25.6×18.1	1枚	可	
AH02-1234	原爆被災記録映画製作原案	1945年(昭和20年)8月20日ごろ以降	相原秀二氏が記した原爆被災記録映画製作のための原案。相原氏の別の資料の中に1945年(昭和20年)8月20日ごろに原爆記録映画の企画を立案したと記してあったが、その原稿かどうかは不明。この資料には事務処理の必要から作った原案というメモ書きがあり、後に書いた可能性もある。日本映画社の原稿用紙に製作意図・映画の構成などが記され、被害の実態をできるだけ正確かつ科学的に記録するという思いが記されている。また、製作協力関係者として東京帝国大学(現東京大学)教授の都築正男氏、理化学研究所主任研究員の仁科芳雄氏、大阪帝国大学(現大阪大学)教授の浅田常三郎氏ら当時の第一線で活躍する研究者の名前が記されている。	25.7×18.2	3枚	可	原案6枚がルーズリーフの用紙3枚の両面に貼り付けてある。
AH02-1256	米国戦略爆撃調査団 ダニエル・マックガバン氏 から日本映画社への 文書(英文)	1946年(昭和21年)5月21日	米国戦略爆撃調査団の映像班の一員として原爆被災記録映画の監修責任者として名を連ねたダニエル・マックガバン氏から日本映画社へ宛てたもの。映画の中で使用する音声や音楽について記されている。	29.6×21.6	1枚	可	資料はルーズリーフの用紙に貼り付けてある。
AH02-1265	原爆被災記録映画 線画題名控	1946年(昭和21年)2月～4月	原爆被災記録映画の中に挿入する広島・長崎分の線画(グラフ)の題名控。ほぼ英文で記されている。	31.3×22.5 29.6×21 29.6×39.8	6枚	可	31.3×22.5が4枚、29.6×21が1枚、29.6×39.8が1枚。資料はルーズリーフの用紙に貼り付けてある。
AH02-1273	原爆被災記録映画の フィルム使用状況と 撮影日一覧	不明	原爆被災記録映画の広島放射能について、場面ごとに使用したフィルムの長さや撮影日をまとめたもの。	29.5×37	9枚	可	
AH02-1276	原爆被災記録映画 米国送付リスト(英文)	1946年(昭和21年)4月～5月ごろ	米国へ送付する原爆被災記録映画の撮影フィルムのリスト。映画の各編ごとに使用したフィルムの長さがまとめられ、未使用のネガフィルムのリストも含まれている。	31.3×22	4枚	可	資料はルーズリーフの用紙に貼り付けてある。
AH02-1439	広島・長崎での映画撮影と 調査日程表	不明	広島・長崎での原爆被災記録映画の撮影や学術調査団の調査日程が記されている。映画製作当時ではなく、後に書かれたもの。	25.7×18.2	2枚	可	